みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

北方地域における植物性染料,
特にハンノキの利用と信仰について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2015-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 齋藤, 玲子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5615

北方地域における植物性染料、特にハンノキの利用と信仰について

齋　藤　玲　子*

Vegetable Dyes, particularly Alder Dyeing and Beliefs concerning it among Northern Peoples

Reiko SAITO

Northern peoples had used some dyes in common for coloring the fur and skin of animals and the fiber of plants. Most of them were vegetable dyes extracted from such as barks and berries.

Ethnobotanical studies had laid emphasis on edible and medicinal plants, in consequence the attention has not been focused properly on dying in the plant utilizations. Dyeing may have not only aesthetic effect, but also durableness as tanning.

This paper will focus on the alder which has red dye, and symbolism of red-colored fur of seal pup. There are many beliefs connected with alder, which has been used for ritual and as medicine. For the color symbolism of northeast Asian peoples, red was the color of "life" associated with the image of blood. Colored tassels of unborn and/or pup of seal fur have served as an important element of clothing in Siberia. They were sewn onto shamans' garments, hats and so on. The similar manner can be found among Sakhalin Ainu as well.

Dyeing has spiritual meanings as a magic for successful hunting, an amulet for healing and the power to shaman. The reason for Northern Peoples community of dyeing may be asked for these beliefs concerning color and material.

* 北海道立北方民族博物館学芸員

キーワード　染色、ハンノキ、信仰、赤、皮鞣めし、有用植物、北方民族
Key words　Dyeing, Alder, Belief, Red, Tanning, Useful plants, Northern Peoples

北方地域の染色

寒冷地である北方地域において、植物は食物や造型素材として、動物に比べて大きな割合を占めていないが、それ故か狩猟、漁撈に比べ、植物採集についての広範囲な比較研究は少ないように思われる。

民族植物学では、方名（vernacular name）の分類、食用および薬用植物には注目されていたが、まだ歴史が浅く、研究手法の確立や未調査地域が多いことなどが課題であると言われてきている。本稿ではこれらあまり触れられることがなかった北方地域の染色文化について、それぞれの民族の知識とそこで彼らが行う根拠づけなど技術や精神文化についてとりあげてみた。また、博物館という施設がら物質文化は常に念頭にある分野であり、特に衣類などについては防寒といった機能面だけでは説明できない色や文様について調べてみたいと思っていた。

極彩色の花や鳥の多い南方の暖かい地域に比べ、北方では色彩が乏しいように思われがちだが、この寒い地域に住む人びとが作り出す衣服や儀礼用の道具などに表れる色と文様は、非常に豊かなものを持っている。交易品としてビーズや布、刺繍に用いる糸などが、入手できるようになる以前から、彼らは染色の技術をもって、独自の色の世界を作り上げていた。

ハットの北方諸地域における皮衣類に関する広範な研究は、これらの染色文化についてもさまざまな事例に言及しており［HATT 1969］、上村六郎は、アイヌの染色文化について大陸との関係を示唆していたことが、本論を書くにあたり、手掛かりとなった［上村　1943］。

染められる素材と染料の種類など北方における染色の概要[1]を文末の表1に示した。

北方地域の主な被服材料は毛皮、あるいは毛を取り除いた革（レザー）であり、それらを染める技術を持つ地域は広範で、‘ハンノキ’樹皮による赤い染色は、サミからイヌイトの西方にまで及び、特に北東シベリアでは多くの事例が知られている。セントラルエスキモーでは、植物による染色の事例が乏しいが、グリーンランドでは漂白した薄いアザラシ皮を、ある種のスプルース（トウヒ属）の根で赤く染める。このようにツンドラ地帯という樹木の少ない地域も含め、地理的分布に空白地帯があるものの、樹皮による染色は広く見られる。

ハットは、今日でも原典とされる主要な民族誌を基にして著した「ユーラシアとアメリカにおける極北の皮衣についての民族誌的研究」で、染料について植物性の鞣めし剤（媒剤）利用とその起源の観点から触れている。彼は、動物性の媒剤（脂肪や脳

髄、卵など）は、もともと皮に柔軟性と防水性を与えるために皮革処理や皮製品のケアに用いられていたが、植物性の媒剤は初めは染料として利用され、後に鞣めしの効果が知られるようになったと仮定すると、その起源に十分な説明を与えることができ納得がいくと考えていた。それを裏付けるような事例が多いのは確かである。

染料には‘ハンノキ’以外にも、カラマツ、シラカバ、ビャクシン、ポプラなどの類の樹皮が利用される。これらの樹皮はタンニンを含み、皮鞣めしの媒剤としての効果をも備えている。染色した皮は、しないものより湿気に強いというボゴラスのコメントは、この効果を指している[2)]。

種によって量は異なるが、タンニンはいろいろな植物の器官に含まれており、色素を作ったり鉄塩と反応して暗青色になる性質を持っているため、染料とされるものも多い。

また、植物を焼いた炭をにかわや脂と混ぜて擦りつけたり、海泥などで黒くする例は広く一般的である。

鉱物質の沼地などにつける方法もみられ、植物性の染料とこれらを組み合わせることは、意図していなくとも媒染に相当する。チュクチでは、皮を暗色に仕上げるため、鉄分を含んだ砥石の粉を使う［Bogoraz 1904-09］。鉱物質にもまた、鞣めしの効果を持つものがあり、特に代表的なものは明礬である。

皮革の色はもともと茶系から黄白色であり、染色は赤と黒の2種類が一般的である。染料を用いないが、革鞣めしの一環で燻煙することにより、黄褐色を得ることもできる。また、染色ではないが色を添えるものとして、寒気に晒すなどして皮を漂白する技術があることもあげておきたい。漂白することによって、より染色の効果を上げることもできる。

次に、毛（あるいは毛皮）を染めることを目的とする染色がある。これらは装飾的なものに用いられ、前述の樹皮以外に、果汁などを用いる民族が多い。鞣めし効果のあるタンニンの有無によらず、良い色に染めることを目的にしているためと考えられる。

‘ハンノキ’などによって赤く染められた毛が、飾りとして用いられる事例は、極東シベリアで非常によく見られ、このことについては別項で触れることにする。

北西海岸インディアンのチルカットブランケットは、黒、黄、青、まれに赤く染めたシロイワヤギの毛が用いられる。ここでは、黒と黄色は植物で染められるが、青は酸化銅による［Samuel 1982］。

以下に毛皮や皮革を実際に染める工程について、コリヤークとエヴェンの例を民族

誌から紹介したい。「様々な色合いの赤い染料は、オーカー（黄土・赭土）、‘ハンノキ’樹皮、ガンコウランの実などから作られる。オーカーはペイントとしても用いられ、乾いたまま（例えば木製仮面の頬を塗るなど）でも、水に溶いても使う。‘ハンノキ’樹皮は主として、毛皮が内になるように作られたトナカイ皮の衣服を染めるために役立つ。仕上げた服は樹皮（あるいは水で煮たもの）と一緒に揉まれたり、熱い煎汁の中に浸される。前者では、色ムラができるが、後者は明るいシナモン色が得られる。この工程には特別な鍛練を要する。巧みな技を持つ者は海岸コリヤークの女性にみられ、見栄えのする明るいシナモンの色あいを出す方法を知っている。熱い‘ハンノキ’染料で扱われた後硬くなった皮は、柔らかくするために再び揉まれる。」［JOCHELSON 1908：628］。「皮の準備はそれを身体のどの部分に着けるかによって、さまざまな形式で行われる。しかしすべての鞣めしは同じ方法で始められる。乾いた皮は脂肪と細胞がすっかり取り除かれるまで、肉面がこそげおとされる。それから肉面は ― よく使うある方法で ― ‘ハンノキ’皮と尿の煎汁で揉まれ、折り畳んで暖かい場所に一晩寝かされる。次の日、再びスクレイパーでこそがれ、それが服に適するように、柔らかくなるまで揉まれる。」［BERGMAN 1927：201-202］。

樹皮繊維を衣類に用いるのは、北太平洋の南端にあたる北海道、サハリンのアイヌと北西海岸インディアンに限られ、北太平洋の幾つかの民族で靴下などに用いられることが知られているが、これら繊維製衣類をはじめバスケットや漁網などの植物繊維が染色される例も少なくない。

例えば、コリヤークのバスケットは、ヤナギランの皮を海泥やスワンプ・モス（コケの一種）の煎汁につけて黒く染めてから、糸に撚って用いる。また、イラクサなどから作られた漁網が、そのままでは白くて魚に気付かれるため、樹皮などで染めるという事例はハンティやマンシ、ネギダルに見られる[3]。

北西海岸インディアンの住む地域は、高緯度にありながら比較的温暖湿潤で毛皮の衣類はあまり発達しておらず、植物繊維の織物や編み物を身に着けていた。なかでも帽子はバスケット細工で美しいものであるが、トリンギットはシダ類その他の草の茎を横糸に巻き付けて装飾していた。その茎は漂泊して白色として用いられたり、黒、黄、赤、紫などに染色された。いずれも植物性染料を用い、ヤギの毛を染めるときと同様であるが、赤は‘ハンノキ’でできた尿を溜めておく容器からとられたという。

樹皮繊維利用の発達しているアイヌでは、アツシ（オヒョウなどの内皮から取った繊維でから作られた織物）や莫蓙などには、大まかにいって赤（茶も含む）黒（藍から紫も含む）、黄色に染色された糸が用いられる［上村1943，河野1931，OHNUKI-

TIERNEY1974]。ほとんどが樹皮の煎汁か花や実の汁で染められ、染色後に鉱物質を含んだ水（沼など）に浸す例もみられる。黄色はキハダ樹皮で染色されるが、最も尊い色として日常的には用いられない。黄染された糸は儀礼に用いる花莫莚に編み込まれ、キハダ自体もイナウに用いたり、薬用にもされる。松浦武四郎は1862年ころに以下のような記録を残している。「扨爰にて胡女が種々の色糸にてアツシを織り居たりしが、其染方を聞に赤く染る時はラルマニ（イチイ；筆者注）にて煮ると。是は則伽羅木、…中略…。松前にてヲンコと云。家々染物を成すに用ゆる也。是をヲンコ染と云也。鼠には沼に浸し置、黄茶には赤楊（ハンノキ；筆者注）の皮もて煮、紫は岩樅（イツキマイマイ）（ガンコウラン）の實。藍にはシエイキナ（上村によるとタイセイ；筆者注）とて深山の陰地に生じ…。」[松浦　1977：511-514]。

アイヌは、あまり媒染剤を用いないと言われてきたが、上記文献からも必ずしもそうとはいえない。しかしアイヌに限らず媒染剤を用いずに草木（煎）汁だけで染める場合、十分な色を出すには相当量を必要とする。したがって染料に使う植物の採集にもそれなりの時間が費やされていたことになるし、食用と目されている植物遺存体の中に染料としての用途も考えられるものが、多く含まれているという指摘は［辻1983]、植物利用全体のなかで今後注意すべきことであろう。

北米のインディアンに見られるクイル（ヤマアラシの棘など）はビーズが入手できるようになる以前に、皮革や樺皮製品を装飾する材料として用いられてきたが、これも黒、赤、黄、紫などに染める染料のほとんどが植物性のものである［WHITEHEAD 1982]。

‘ハンノキ’の利用と信仰

赤色染料として広く用いられるカバノキ科ハンノキ属（英名Alder）は、切り口が赤く変色することから火に関係付けられたり、人体からの出血を思わせるため切ることが差し控えられると、ヨーロッパなどで一般的にいわれている。‘ハンノキ’の汁と血の連想は北方地域にもみられ、それにまつわる信仰には興味深いものがある。

北海道にはハンノキ属が3種見られる。ケヤマハンノキ(*Alnus hirsuta*; アイヌ語でKene）はサハリン、千島からシベリア東部にも分布し、ハンノキ(*A.japonica*別称ヤチハンノキ；アイヌ語でnitat・kene 湿地の・ハンノキなど）は北海道からウスリー地方が北限である。ミヤマハンノキ(*A.crispa*;アイヌ語でkamui・kene、horkew・keneなど）は亜高山帯から高山帯に自生する種で、ウスリー、サハリン、千島、

カムチャッカにも分布する。シベリアの民族誌に現れるAlderはケヤマハンノキかミヤマハンノキの変種、あるいはEuropean Black Alder（*A.glutinosa*）などいずれであるか特定できない。北米ではこの他にも何種か自生する。本稿ではアイヌの事例以外は種を特定できないものとして、すべて‘ハンノキ’を使ってきた。

アイヌ語のケネはkem・ni血（の）・木という意味で、月経や産後、肺病の喀血など多量の出血があったときに補血剤として樹皮の煎汁を服用したという[4]。『コタン生物記』［更科・更科　1976］では「薬になる木」の最初にこの木があげられ、前述以外にも煎汁を腹病、下痢、中毒に服用したり、目の悪いときに洗眼剤としたり、木の真皮を潰したものを傷の血止めに用いたという。『アイヌ醫事談[5]』にも同様の例がある。また、これは子供の健康とも関連付けて考えられるらしく、赤ん坊に授乳を始める前にケヤマハンノキの煎汁を飲ませたり[6]、おしゃぶりを作る木としても知られている[7]。上村の聞き取り[8]によると、「たゞ何の意味か分からんが、子供は髪にケネ染のものをつける。女も亦赤いものを用いる。」という。また、ケヤマハンノキのみならず、ハンノキの皮もまた保存しておいて、産後に服用した。

ケヤマハンノキとミヤマハンノキは一般のイナウには用いないが、沖の神であるシャチは赤い色を好むため漁に出る際に捧げるイナウを作る[9]。ケヤマハンノキのカムイケネ、ホルケウケネ（horkewはオオカミ、もとはporo・kewe・kene；大いに悪魔を追う・ハンノキ）はここからきたのだろうと考えられている［知里　1976］。

サミの太鼓の皮には、神話によるモチーフがハンノキの煎汁で描かれている。様々な図匠には、太陽や月などと並んで自然界をつかさどる多くのカミが表現され、その中に*leib-olmai*；‘the man of blood or of alder’と訳される、野性動物とvenison（猟獣肉とくに鹿肉）を支配する狩猟のカミがいる［MANKER 1968］。また、ハットによると、クマ狩猟者が帰宅したときは、女性が嚙んだ‘ハンノキ’樹皮を彼の体に吹き付けたりすることから、サミには‘ハンノキ’の汁と猟獣の血との関係には神秘的な観念があるようだという。

コリヤークもまた‘ハンノキ’を非常に良く用い、革の衣服に木製スタンプで、星などの文様をつけるときの染料に用いている。サミの太鼓とならんで、素材全体を染めるのではなく、描き染や捺染（なつせん）に分類される文様を表す方法である。

コリヤークの伝承にも、カラという悪神をキツネ女がやりこめる話の中に、しばしば‘ハンノキ’が登場する。例えば、キツネ女はカラが食べようとして取っておいたネズミを逃がしてやる。帰ってきたカラがキツネ女を責めると、キツネ女は用意しておいた‘ハンノキ’の煎汁を自分の血の混じった尿だといって見せて、「私は病気な

のだからそんなことはできない」という言い訳をするのである［JOCHELSON 1908：181］。ここでも、血との関係がうかがえる[10]。

儀礼用あるいはシャマンの衣類と色 ～赤く染められたアザラシの毛

赤い染料としてのハンノキ利用とそれにまつわる信仰についてみてきたが、赤が衣類に用いられる事例としてシャマンの衣類、特に帽子がある。それらにつけられた長いタッセルの赤い毛は、アザラシの生まれたばかりの幼獣あるいは胎児の毛を、‘ハンノキ’などで染めたものである。これらの赤い毛は、ユカギール、コリヤーク、チュクチ、イテリメン、エヴェンなどの服に飾りとしてつけられ、新大陸では、ネルソンがベーリング海エスキモーで服やブーツの飾りとして用いられていることを記録している［NELSON 1899］。コリヤークの死装束は、白い毛のトナカイの服上につけられた黒い毛のモザイク模様に、この赤が映えて非常に美しいものである。

セロフはこれらのことについて、北東アジアの民族の色のシンボリズムでは、黒は別の世界、あの世（死）の色で、一方赤は生命の色であるとして、「レッドオーカーや生け贄の動物の血で赤く塗った手や顔は、チュクチの結婚式や死者を弔う儀式において重要な要素である。儀礼的なものやシャマンの衣装は、撚った毛糸か毛皮の赤いタッセルで飾られる。…赤と黒は相反する色であるが、一方白はニュートラルな役割を演じている。シベリアエスキモーでは、年老いたシャマンの力強さの喪失は彼の身に着ける白い衣装によってシンボライズされる。白い衣装は死装束の色でもある。三色のコンビネーションはエスキモーの天気予言者の占い棒にも用いられる。この色のシンボリズムは、宗教上の領域でのみ適応する；毎日の暮らしの中では、白い衣装はもっとも美しいとみなされている。」［SEROV 1988］と説明している。

シャマンの衣類につけられたタッセルやフリンジは、踊りによってゆらめくその形態だけでも十分意味のあるものである［CHAUSSONNET 1988］。それらを赤くすることで、一層力を強めることが期待されるのだろう。

赤く染められた毛は必ずしも儀礼用の服やシャマンの服のみにつけられたとは限らないが、非常に尊重されたものであることは確かなようだ。

クラシェニンニコフは「ステラーによるとラムート（エヴェン）はカムチャルダ（イテリメン）よりもアザラシ皮の仕上げ方は上手でラムートはこうした皮を1枚について80コペイカほどの値段で売っている。アザラシの皮は簡単に色物ともよばれ、衣服や履物に縫い込まれる。この毛はコケモモの絞り汁に‘ハンノキ’の皮および明

礬を混ぜたもので染められる。この色は真っ赤である」と記している[11]。彼が引用しているこの話は18世紀半ばのことであるが、ベルグマンも今世紀初頭に次のように書いている。「ラムートは服に用いる皮を染めるのに、非常に長けている。女性の服は、ビーズのついている上下が、普通沢山の異なる色の破片の小さな縁飾りで飾られている。美しい赤い色はwhortleberry（欧州産コケモモ属の一種、別名ビルベリー）の果汁で染めることによって得られ、もう一つは‘ハンノキ’による。シャマンの帽子のフリンジは、たとえば、whortleberry果汁で染めたアザラシの胎児の毛皮から作られたタッセルで成っている。

ラムートが綺麗な帽子やコート、ブーツなどを身に着けて街へいくと、ロシア人やカムチャダルがそれをねだったり、時には酔わせて盗み、代わりに着古したものを残していくのだという。」[BERGMAN 1927]。

チュクチでは「若い男性が着るズボンは、しばしば赤く染められたアザラシの幼獣毛皮製のタッセルを沢山付けている。多くのタッセルの付いたズボンはレスリングの名声に係る勝者の権利で、そういったことから“レスラーズ・トラウザーズ”と呼ばれている」[BOGORAZ 1904-09]。

‘ハンノキ’による皮革の染色が顕著な、カムチャツカからチュコト半島の北東シベリアの民族に、このようにアザラシの白い毛を赤く染めて飾りにするという習慣が認められる。

興味深いのは、使途が若干異なるが、このような事例がサハリン・アイヌにも見られることである。

「アイヌ衣服調査報告書」[北海道教育委員会　1985] にサハリンのエムサハ（刀掛帯）の編み糸に赤く染めたアザラシの幼獣の毛が使われている例があり、聞き取り調査によると、昔は植物で染めたという。知里も「樺太アイヌの生活」のなかで、ゴマフアザラシとワモンアザラシの生まれたかりの幼獣をコノシペ（kon・us・pe；綿毛の・ついている・もの）といい、「この毛をアイヌは珍重する。毛を小刀で採り、ほぐすと一種の綿毛のやうなものがとれる。これをコンコニkonkon(i)と云ふ。アイヌはこのコンコニを糸に撚り、苔桃の実などで赤く染めて海豹衣だとか魚皮衣、また厚司の縫ひ目や、刺繍の飾りとして縫ひつける。」と記している。古くは、享和元年ころの記録で『樺太雑記』[中村　1801] に「婦人の業、からむしを以ゆたるべを織、水豹皮にて沓を造る。此両品松前市店に有。略之。其外水豹腹籠の子の毛を取り糸にして、草根を以赤色に染、衣類の模様縫付る。」とある。松浦竹四郎は1846年（弘化3年）にアザラシの毛を「夷言チクイラ　夏青く秋に至りて赤し、蝦夷之を食す。夷

言チライキナ　此二品の実を油にて煎し、水獣の皮及び糸を染るに用ゆ。」と記録している。チクイラはイワツツジで可食の赤い実がなるが、チライキナはサハリンでエゾフユノハナワラビ（シダ植物）、本道でフクジュソウをさし、実で染めるというのは少し疑問が残る[12]。アザラシの油で煎じるという事例は、他の記録からも拾える。

また、年代や著者は不明であるが、『蝦夷人弾琴図』に「根緒アザラシの腹ゴモリノ毛ヲ赤クソメテヨリタル物也、腹ゴモリノ毛ニアラザレバ染ラヌナリ、其染草ハハマナシノ根、玫瑰夷名“マブタ”日本方言ハマナシト云」[谷本　1958] とある。谷本は、「この赤色に染めるのも又前述した如くシャーマンの祭具としての遺影であろう。」として、五弦琴の頭部の穴に結ばれた赤青黄の布や太鼓（カチョ）につけられた布と同様、本来シャマンの祭具としての機能を持つ物であったことを示唆している。

氷上で出産する種のアザラシの幼獣は、敵から身を守るため白い産毛を持っている。北方地域には、部分的にでも白い冬毛を持つ動物は少なくないのだが、アザラシの毛が染色に適しているということ以外に、幼獣あるいは胎児であることに意味があったのかもしれない。ちなみにトナカイでも幼獣や胎児はその柔らかい毛の性質のため、晴れ着やフードの部分などに好んで用いられている。

ただし、いろいろな民族誌をみても、アザラシの場合、生まれたばかりの幼獣や妊娠しているメスを故意に狙うということはなかったようである（飼育しているトナカイならば、服にするため屠殺することはある）。生後１ヶ月くらいで白い毛は生え変わるため、入手できるのは比較的短い時期に限られるが、アザラシ猟の中心は、出産期でもある春の流氷期にあることから、出会うチャンスは結構多かったのだろう。

このように、北東シベリアからベーリング海にかけての北太平洋にみられるこの独特の飾りは、カムチャッカの住民のなかで、海岸のチュクチやコリヤークから原材料（アザラシの毛皮）がエヴェンの手に渡り、染められて戻ってくるという交換はあったものの [Chaussonnet 1988] 、それぞれの民族においてもより鮮やかな赤をもとめて、行き着いた先が同じ素材だったという説明が自然なのではないかと思われる。他の北太平洋沿岸の海獣狩猟民族やニブフ、ウイルタ、また千島や北海道のアイヌにおけるこのような事例については、現在のところ不明であるが、今後の課題にしておきたい。

ま　と　め

北方の諸民族は、毛皮や植物などを染めるために、多くの共通する植物を利用して

いた。より微妙な色を出すためになされた工夫は、試行錯誤の過程がうかがえ、それぞれの土地の自然物に対する知識の集積を示しているようである。関連して、染料となる植物の採集や保存の面についても研究する必要がある。

染色によってあらわれる色と染料の素材とのあいだには、色という見た目の共通点のみでなく、その民族なりの論理があった。殊に赤い染料となる‘ハンノキ’は血や生命と関係づけられるため、さまざまな信仰がみられ、儀礼や薬にも使われている。また、赤や黒、白など、色に対する共通したシンボリズムにも、若干触れてみたが、今後、より多くの民族を比較する必要がある。

染色には、素材を美しくするだけではなく、丈夫にするという実質的な利点もあった。また、狩猟を成功させたいという欲求やシャマニズムなど精神文化と関連しており、生活と深く結びついていることがわかった。ただ素材の種類が乏しいからではなく、このような理由があるからこそ、北方地域に広く共通する染色文化が存在するのではないだろうか。

註

1）それぞれのデータは主な民族誌などから抜粋している。基本的に染色といった場合、繊維に浸透して色素を定着させることを指し、顔料のように被染物に付着させることとは区別される。

2）Bogoras, Waldemar 1904-09 : p.219

3）Levin, M, G, and L.P.Potapov(ed.)　1964　*The Peoples of Siberia.* Khants and Mansi : p.518,　Negidal : p.687

4）知里真志保　1976 『分類アイヌ語辞典　植物・動物編』ケヤマハンノキの項目より

5）関場不二彦　1896 「あいぬ醫事談」（1980『アイヌ史資料集　第三巻』所収　北海道出版企画センター）

6）久保寺逸彦　1969 「哺乳」『アイヌ民族誌　下』 第一法規出版

7）萱野　茂　1978 『アイヌの民具』 すずさわ書店

8）［上村　1943 : p289］明治15年生まれの山下三五郎氏より

9）［更科・更科　1976］ハンノキの章より

10）アリュートは仮面や狩猟のときに被る帽子などさまざまな木製の器物に赤、黒、緑の色を施しており、この場合の赤は染料ではなく血とベンガラなどの鉱物質の塗料ではあるが、投槍器の背に塗られる黒は毛皮を、腹側に塗られる赤は血を表すな

ど［LAUGHLIN 1952］、特に狩猟との関わりがうかがえる。このような赤と黒の用いかたは、アラスカ西岸の他の民族にも認められる。

11）クラシェニンニコフ，S.P.「カムチャツカの住民について(2)」加藤九祚訳　1966『北アジア民族学論集(3)』より

12）知里真志保の辞典によれば、エゾフユノハナワラビかフクジュソウであるが、前者はシダ植物で実はならず、後者はそう(痩)果で、染料に用いたという記録は他の文献にもない。イワツツジに混ぜるということか。

引用文献

BERGMAN, Sten

1927 *Through Kamchatka by Dog-sled & Skis*. London: Seeley, Service & Co.Limited

BOGORAS, Waldemar

1904-09 The Chukchee. *The Jesup North Pacific Expedition* 7, *Memoirs of the American Museum of Natural History*. Leiden/New York (Reprinted 1975, New York : AMS Press.)

CHAUSSONNET, Valerie

1988 Needles and Animals: Women's Magic. In W.W.Fitzhugh & A.Crowell(ed.), *Crossroads of Continents: Cultures of Siberia and Alaska*, Washington:Smithsonian Institution, pp. 209-226.

知里真志保

1973「樺太アイヌの生活」『知里真志保著作集　3』所収　東京：平凡社

1976『知里真志保著作集　別巻Ⅰ　分類アイヌ語辞典　植物・動物編』

HATT, Gudmund

1969 Arctic Skin Clothing in Eurasia and America an Ethnographic Study *Arctic Anthropology* 5(2) : 1-132 (Translated from J.H. Schultz, *Forlagsboghandel Graebes Bogtrykkeri*, 1914.)

北海道教育庁社会教育部文化課編

1985『アイヌ衣服調査報告書(Ⅰ)　－アイヌ女性が伝承する衣文化－』札幌：北海道教育委員会

JOCHELSON, Waldemar

1908 The Koryak. *The Jesup North Pacific Expedition* 6, *Memoirs of the American Museum of Natural History*. Leiden/New York (Reprinted 1975, New York:AMS Press.)

キュー, D. P. E. ゴッダード

1990 『北西海岸インディアンの美術と文化』菊池徹夫・益子待也訳　東京：六興出版

河野広道

1931 「アイヌの織物染色法」『北方文化論　河野広道著作集Ⅰ』1971刊所収　札幌：北海道出版企画センター

LAUGHLIN, W.S.

1952 The Aleut-Eskimo Community. *Anthropological Papers of the University of Alaska*. vol. 1, No. 1

LEVIN, M.G. and L.P.POTAPOV(ed.)

1964 *The Peoples of Siberia*.(Trans. ed. by Stephen Dunn. Chicago: The University of Chicago Press.)

MANKER, E

1968 *Seite* Cult and Drum Magic of the Lapps. In V.Dioszegi(ed.) *Popular Beliefs and Folklore Tradition in Siberia*. Budapest: Akademiai Kiado

松浦武四郎

1846 「再航蝦夷日誌」［河野　1931］より

1862 「天塩日誌」（1977『松浦武四郎紀行集　下』所収　冨山房）

中村小市郎

1801 「唐太雑記」 高倉新一郎編1982『犀川会資料全北海道史資料集』所収　北海道出版企画センター

NELSON, E.W.

1899 *The Eskimo About Bering Strait*.(Reprinted 1983 Washington: Smithsonian Institution)

OHNUKI-TIERNEY, Emiko

1974 *The Ainu of Northwest Coast of Southern Sakhalin*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.

SAMUEL, Cheryl

1982 *The Chilkat Dancing Blanket.* Seattle:Pacific Search Press

更科源蔵・更科光

1976 『コタン生物記Ⅰ　樹木・雑草篇』 東京：法政大学出版局

佐々木史郎

1992 「北海道、サハリン、アムール川下流域における毛皮及び皮革利用について」小山修三編 『狩猟と漁労』 東京：雄山閣

SCHEFFERUS, Johannes

1674 *The History of Lapland.* (Reprinted 1971. Stockholm: Rediviva Publishing House)

SEROV, S.Ia.

1988 Guardians and Spirit-Masters of Siberia. In W.W.Fitzhugh & A.Crowell(ed.), *Crossroads of Continents :Cultures of Siberia and Alaska,* Washington:Smithsonian Institution, pp.241-255.

谷本一之

1958 「アイヌの五弦琴」『北方文化研究報告　7』

辻　秀子

1983 「可食植物の概観」『縄文文化の研究2　生業』 東京：雄山閣

上村六郎

1943 『民族と染色文化』 大阪：靖文社

WHITEHEAD, Ruth Holmes

1982 *Micmac Quillwork.* Halifax: The Nova Scotia Museum

表1　各民族の主な染料　Table 1 Traditional Dyes Utilized by Northern Peoples

サミ　Sami

被染物 Material	色 Color	学名 Scientific Name	和名 Common Name	部位 Part	出典 Reference
革 Leather	赤 red	*Alnus sp.*	ハンノキ Alder	樹皮 bark	HATT 1969 SCHEFFERUS 1674
〃	色を濃く deep red	*Alnus sp.* +*Potentilla erecta*	キジムシロ属の1種を混ぜる Cinquefoil	樹皮bark 根root	HATT 1969
〃	明るい金茶 golden-brown	*Alnus sp.* +*Juniperus sp.*	ネズミサシ属の抽出液を混ぜる Juniper extract	樹皮bark 樹皮bark	HATT 1969
〃	濃い赤茶 deep red-brown	*Alnus sp.* +ash	灰を混ぜる ash	樹皮 bark	HATT 1969

ハンテイ、マンシ　Hanti, Mansi

草皮 bark	暗茶 dark brown	*Prunus racemosa*	エゾノウワミズザクラ Bird-cherry	樹皮 bark	LEVIN 1964

ネギダール　Negidal

草皮 bark	薄い色付け tint	*Larix sp.*	カラマツ Larch	樹皮 bark	LEVIN 1964

ヤクート　Yakut

皮 skin	赤 red	*Alnus sp.* +*Larix sp.*	ハンノキ Alder カラマツ Larch	樹皮bark 樹皮bark	HATT 1969

エヴェンキ　Evenki (Tungus)

皮 skin	赤 red	*Alnus sp.*	ハンノキ Alder	樹皮 bark	HATT 1969
毛 hair	赤 red	*Asperula tinctoria*	クルマバソウ属の1種 Woodruff	根 root	HATT 1969

エヴェン　Even (Lamut)

毛皮 fur	赤 red	*Vaccinium myrtillus*	ビルベリー（クロマメノキに近緑） Whortleberry	実 fruit	BERGMAN 1927
〃	赤 red	*Alunus sp.*	ハンノキ Alder	樹皮 bark	BERGMAN 1927
〃	濃い赤 deep red	*Vaccinium vitis-idaea* +*Alnus sp.* +Alum	コケモモCowberry ハンノキ Alder 明礬 Alum	実fruit 樹皮bark	クラシェニンニコフ 1756

サハリン・アイヌ　Sakhalin Ainu

毛　皮 fur	赤 red	*Vaccinium vitis-idaea*	コケモモ Cowberry	実 fruit	知里　1973
〃	赤 red	*Vaccinium praestans*	イワツツジ	実 fruit	松浦　1846
〃	赤 red	*Rosa rugosa*	ハマナス Rugosa rose	根 root	『蝦夷弾琴図』
樹　皮 bark	赤 red	*Alnus sp.*	ハンノキ Alder	樹皮 bark	OHNUKI-TIERNEY 1974
〃	明るい赤 bright red	*Vaccinium vitis-idaea*	コケモモ Cowberry	実 fruit	OHNUKI-TIERNEY 1974
〃	紺 navy	*Empetrum nigrum var. japonicum*	ガンコウラン (Crowberry)	実 fruit	OHNUKI-TIERNEY 1974
〃	黄 yellow	*Phellodendron amurense*	キハダ Amur Cork-tree	樹皮 bark	OHNUKI-TIERNEY 1974

北海道アイヌ　Hokkaido Ainu

樹　皮 bark	赤 red	*Taxus cuspidata*	イチイ Japanese Yew	樹皮 bark	河野　1931
〃	赤 red	*Alnus hirsuta*	ケヤマハンノキ	樹皮 bark	河野　1931
〃	赤 red	*Alnus japonica*	ハンノキ Japanese Alder	樹皮 bark	河野　1931
〃	赤 red	*Quercus dentata*	カシワ Daimio Oak	樹皮 bark	河野　1931
〃	黒 black	*Juglans sieboldiana*	オニグルミ Siebold Walnut	外果皮	河野　1931
〃	黒 black	*Cercidiphyllum japonicum*	カツラ Katsura Tree	樹皮 bark	河野　1931
〃	黒 black	*Fritillaria camtschatcensis*	クロユリ Kamchatka lily	花 frower	河野　1931
〃	紺 navy	*Empetrum nigrum var. japonicum*	ガンコウラン (Crowberry)	実 fruit	河野　1931
〃	薄紫 light purple	*Rosa rugosa*	ハマナス Rugosa rose	実 fruit	河野　1931
〃	藍 indigo blue	*Isatis yezoensis?*	ハマタイセイ？	葉 leafe	上村　1943
〃	黄 yellow	*Phellodendron amurense*	キハダ Amur Cork-tree	樹皮 bark	上村　1943

コリヤーク　Koryak

毛皮・革 fur,hide	赤 red	*Alunus sp.*	ハンノキ Alder	樹皮 bark	JOCHELSON 1908
皮 skin	黒 black	*Vaccinium oxycoccus?*	ツルコケモモ？ (Cranberry)	実 fruit	JOCHELSON 1908
草　皮 bark	黒 black	*Empetrum nigrum* +*Elymus mollis* ash	ガンコウランとハマニンニクの灰 Crowberry+ash	実 fruit	JOCHELSON 1908
〃	黒 blak		海泥 sea-mud		JOCHELSON 1908
〃	黒 blak		湿地のコケ swamp-moss		JOCHELSON 1908

チュクチ　Chukuchi

革 leather	赤 red	*Alnus sp.*	ハンノキ	樹皮 bark	BOGORAS 1904-09
毛　皮 fur	赤 red	*Alnus sp.* +*Larix sp.*	ハンノキ Alder カラマツ Larch	樹皮bark 樹皮bark	BOGORAS 1904-09

ベーリング海エスキモー　Bering Strait Eskimo

革 leather	赤 red	*Alnus sp.*	ハンノキ Alder	樹皮 bark	NELSON 1899
毛　皮 fur	赤 red	*Alnus sp.*	ハンノキ Alder	樹皮 bark	NELSON 1899

北西海岸インディアン　Northwest Coast Indian

羊　毛 wool	黒 black	*Tsuga heterophylla* +*Cu or Fe*	アメリカツガ＝Hemlockに銅/鉄 +copper/iron	樹皮 bark	SAMUEL 1982
〃	黄 yellow	*Evernia vulpina*	ヤマヒコノリ属の地衣類 Wolf moss		SAMUEL 1982
〃	青緑 blue-green		酸化銅と尿 oxide of copper＋urine		SAMUEL 1982

ミクマック　Micmac

ヤマアラシの棘 quill	赤 red	*Gakium tinctorium*	ヤエムグラ属の1種 Red Bedstraw	根 root	WHITEHEAD 1982
〃	黄 yellow	*Myrica gale*	セイヨウヤチヤナギ Sweet gale	種 seed	WHITEHEAD 1982
〃	紫 violet	*Nucella lapillus*	カキナカセガイの亜種 Nort'n dog whelk	？	WHITEHEAD 1982
皮 skin	黄 yellow	*Coptis trifolius*	オウレン属の1種 Goldthread	葉、茎 leaf,stalk	WHITEHEAD 1982